

---

# 朋友だより

---

本屋でたまたま手にした本がきっかけで、隣の国 韓国に興味を持ちました。折りしも、今年は植民地支配を糾弾した「ダーバン会議」から、20年目です。  
植民地支配した過去を振り返る良い機会です。

2021年6月

(有)コンサルタント朋友  
代表取締役 奥長弘三



## 隣の国のこと



### 久しぶりの茨木のり子詩集

朋友だより2021年6月号です。当初の予定を変えます。従って前号でお約束した東京渋谷で開催中の「古代エジプト展」の紹介は取り止めとさせていただきます。

茨木のり子詩集と再会できたのは、若い韓国人女性金智英(キム・ジョン)氏の著書との出会いがあったからです。たまたま書店で本を眺めていたとき、本の題名に引かれて読んだのがきっかけです。

『隣の国のことばですもの—茨木のり子と韓国—』金智英著(筑摩書房 2020年12月)

この著書によると、茨木のり子は、1976年、50才になってから、ハンゲル語の勉強を始め、韓国をより深く知ろうと努めたとのこと。

韓国の美術を愛してやまなかった彼女は、ハンゲル学習のあと、朝鮮美術の美しさや日本美術への影響などを日本に伝えることに力を注ぎました。韓国の詩人を日本に紹介した『韓国現代詩選』(花神社 1990年)があります。

今回、改めて茨木のり子詩集を読み返しました。20年ぶりのことです。彼女の詩の中で私が最も好きなものは、比較的初期の作品、「わたしが一番きれいだったとき」です。長文ですが、ご紹介します。

わたしが一番きれいだったとき  
茨木のり子

わたしが一番きれいだったとき  
街々はがらがら崩れて行って  
とんでもないところから  
青空なんかが見えたりした

わたしが一番きれいだったとき  
まわりの人達がたくさん死んだ  
工場で 海で 名もない島で  
わたしはおしゃれのきっかけを落としてしまった

わたしが一番きれいだったとき  
だれもやさしい贈り物を捧げてはくれなかった

男たちは挙手の礼しか知らなくて  
きれいな眼差しだけを残し皆発っていった

わたしが一番きれいだったとき  
わたしの頭はからっぽで  
わたしの心はかたくなで  
手足ばかりが栗色に光った

わたしが一番きれいだったとき  
わたしの国は戦争で負けた  
そんな馬鹿なことであるものか  
ブラウスの腕をまくり  
卑屈な町をのし歩いた

わたしが一番きれいだったとき  
ラジオからはジャズが溢れた  
禁煙を破ったときのようにくらくらしながら  
わたしは異国の甘い音楽をむさぼった

わたしが一番きれいだったとき  
わたしはとてもふしあわせ  
わたしはとてもとんちんかん  
わたしはめっぼうさびしかった

だから決めた できれば長生きすることに  
年とってから凄く美しい絵を描いた  
フランスのルオー爺さんのように  
ね

### ダーバン会議から20年

今年は、ダーバン会議から丁度20年になります。過去の植民地支配を振り返る絶好の機会です。

2001年8月～9月、南アフリカのダーバンで、国連を中心に「人種主義、人種差別、外国人排斥および関連する不寛容に反対する世界会議」が開催され、「ダーバン宣言」が採択されました。

この会議は、国連を中心とした会議で、約 8,000 人が参加し、170 カ国、950 の NGO が参加した大きな会議でした。

ダーバン宣言には、次の文言があります。

「植民地主義によって苦痛がもたらされ、植民地主義が起きたところは、どこであれ、いつであれ非難され、その再発は防止されねばならないことを確認する」

植民地体制を許さないだけでなく、過去にさかのぼって「植民地責任」と「植民地犯罪」が問われるのです。

この点では、日本の現状は重大な問題を抱えています。

「韓国併合」についても、いまだに不当・不法なものだったと認めていませんし、日本軍による「慰安婦問題」でも、きちんとした国としての謝罪や賠償を行おうとしていません。

「ダーバン宣言」の精神にたって、日本もきっぱりとして行動をとらなければなりませんし、また必ず歴史によって要請されることになるでしょう。

上記の文章は、志位和夫著『綱領教室第 2 巻』（新日本出版社、2013 年 4 月）P.118 ～ 124 を参考にしました。

## 改めて韓国に関心を持つ

朋友だよりで「アジアの問題」を取り上げたのは、第 162 号（2020.2.25 付）でした。そのときにも、告白したのですが、私自身の関心がアジアより、欧米の方に向きがちなのです。韓国については、これまで、特に関心をもつことはありませんでした。

今回、前述のように金智英の著書や茨木のり子を通して、改めて韓国に関心を持つことができました。

日本とは、また異なった豊かな歴史と文化を持つ国です。戦前、戦中の植民地支配により、日本は大きな犯罪を犯しました。特に「創氏改名」はとんでもない誤りです。祖先から受け継いだ自分の姓を権力により、無理矢理変えさせられました。

朝鮮における「創氏改名」の事実は小学生のとき、学校で習い、知っていました。今回はじめて、被害者の立場に立って考えることができるようになりました。

日本にとって地理的に最も近い外国が韓国です。これからハングル語の勉強を含め、積極的に韓国の歴史、風土、生活などについて勉強していきたいと思っています。

## 近年の日本の右傾化傾向を憂う

最近の日本の政治、社会の右傾化傾向が心配です。

とくに韓国最高裁での徴用工判決以降、その動きが顕著です。事実を事実として認め、それにきちんと向き合い、そこから次の歩みが始めることが、本当の「科学的態度」です。この科学を大切にする心については、朋友だよりの前号（No.169）で取り上げたところです。

現在、世界的に進行中のコロナ禍は、世界中の人達が小異を捨てて、人類として大同団結して、予想以上に手ごわい新型コロナとの闘いに臨むことが求められています。不必要な差別をあおる現在の、右傾化傾向を早急に克服したいものです。

2021.5.30 付の東京新聞「時代を読む」欄に、東大教授の宇野重規さんが、「一切を棄つるの覚悟」というテーマで論考を載せておられます。戦前のジャーナリストで、戦後首相になったものの病に倒れた石橋湛山の評論「一切を棄つるの覚悟—太平洋会議に対する我が態度」にふれられながら、論じておられます。

まさに、今こそ、一切を棄てる覚悟で、コロナウイルスとの闘いで全力を上げるときです。



